

4 年 1 組

自然や暮らしを見つめなおす
～火起こし体験を通して～



自分の力で火を起こしてみたい

4 月半ば、今年度の中核活動について、子どもたちと考える時間を設けました。今年はどんなことをやってみたいか聞くと「長野小には自然がたくさんあるから、自然の中で何か体験してみたい」という意見がたくさんでました。3 年生までヤギやアヒルを飼い「命」について学んできた子どもたち。動物飼育に大切な自然や環境にも目を向けていたのでしょう。そこでわたしが部屋を暗くしろうソクに火を灯してみました。「わー！きれい！」「わくわくするな！」などろうソクの火のゆらめきを見ながら感じる子どもたちに「火を起こしてみない？」と問かけると「いいね！」とみんな賛成しました。今年度は自然やくらしと向き合う活動をしたいと考え、4 年 1 組では「火起こし」に取り組むことに決めました。



初めての火起こしはファイヤースターターという着火道具を使いました。勢いよく火花が散り、麻紐に着火すると一気に燃え上がりました。子どもたちから歓声の音が響きました。初めての火との出会い。燃え上がる火を見て喜びを隠しきれない様子でした。

子どもたちのふりかえりより

- ・初めて火を見たとき、すごく興奮しました。苦勞して起こした火がすぐに消えてしまったので、次は準備をしっかりと火を大事に育てたいです。
- ・火は食べ物を焼くことができる便利なものだけど、危ないものでもあるからやけどをしないように注意したいと思います。
- ・今日はファイヤースターターという道具を使ったけど、ライターやマッチなど使わないで自分の力で火を起こしてみたいです。

自分の力で火を起こしたいとふりかえった子どもたち。2 回目の火起こしでは、自分たちができそうな起こし方を調べ、挑戦してみました。火きり棒と火きり板を使う A さんや、虫眼鏡で太陽光を集めて着火しようとする B さん、火打石になりそうな石や鉄を集めてつけようとする C さんなど、様々な方法でやってみましたが、どれもうまくつきません。A さんのグループでは、なかなか力が伝わらず、火きり棒がうまく回転しません。B さんのグループは一つの虫眼鏡では足りないと考え、をいくつも用意して重ねてみますがつきません。C さんは火打石も火花すら起きなく、石の種類や方法も合っているのか疑問に感じ始めた様子です。火起こしのスタート地点にも立てず悔しい思いをしながらも、どこか子どもたちの目には、きっといつかはできる！という期待に溢れているようでした。



子どもたちのふりかえりより

- ・今回もつかなくて悔しかった。
- ・ファイヤースターターでつけたけど、すぐに消えてしまった。
- ・麻紐に着火したら、落ち葉→細い枝→太い枝に火を移していくといいと思う。

着火後、あわててしまい大量の落ち葉を投入して火が消えてしまうことがよくあったので、火が起きてもあわてず、燃えやすい落ち葉や小枝から太めの木に移して安定させればよいことを知った子どもたちは、3 回目では火を大切に育てることをめあてに火起こしをしました。火をいきなりつけるのではなく、あらかじめ準備しておいたので、あわてることなく火を育てていました。どのグループも火を安定させることができました。3 回の火起こしを通して、これからについて子どもたちと話し合いました。

子どもたちのふりかえりより

- ・火は簡単には起きないことが分かりました。
- ・火きり棒と火きり板を使えば、自分たちの力でも火を起こせるかもしれないと思いました。

火きり棒と火きり板を使うやり方はいくつかありますが、自分たちでもできそうな方法として「舞い切り式」が使いそうだと考えました。すでに舞い切り式を自分で作ってきた子がいたので、操作してみると「いけそう!」「煙出てる!」と今までになかった木の反応に驚いていました。身の回りにはライターやマッチなどすぐに火がを起こせるものがあるにもかかわらず、0から起こしてみたいという子どもたちは自作した舞い切り火起こし器で着火したいと考えました。



可能性が見えてきた 舞切り式火起こし器

早速、舞切り式火起こし器を作って火起こしに挑戦しました。まずは火種をつくることから始めました。「煙が出てきた!」「焦げ臭い!」など期待が膨らみます。ところが、ほとんどのグループは思い切り回しても煙が上がるだけでなかなか火種ができません。回しきると、火きり板の回した場所は使えなくなってしまいます。その度に、使いそうな板の場所にVの字でカットして再度挑戦していきます。2時間くらい挑戦したでしょうか。だんだんとコツをつかみ、火種を作ることができたグループがありました。しかし、多くのグループは火種ができず、他のグループから火をもらうことになってしまいました。あともう一歩で火種が作れる!というところまで来ています。火種を作る大切なヒントを何かつかめそうな様子でした。

子どもたちのふりかえりより

- ・火種ができなかったところは、火きり板のVの字が大きすぎる。
- ・もっと小さくして、広すぎないようにカットすればいいのかな。

この経験から火きり板のVの字の大きさが大切なのではないかと考え始めた子どもたち。火きり板の成功したところと失敗したところを比べてみました。失敗したVの字の角度は90度くらい開いていました。やはりVの字にヒントがありそうです。そこで、うまくいったグループのVの字を参考に角度を求めてみました。角を測ってみると、多少の誤差はあるものの35~40度の範囲が適切なのではないかという結論になりました。新しい火きり板に求めたVの字を丁寧に鉛筆で描き、Vを電動系のこぎりでカットしました。そして改良した火起こし器を使って再度挑戦しました。火きり板から煙が出て、火種ができました。火種ができてもまだ喜べません。小さな火の赤ちゃんを大事に麻紐につつま、息を吹きかけます。すると大きく火が燃え上がりました。今までにない喜びに浸り、大成功に終わりました。しかし、何度回しても煙が起きるだけで火種ができないグループもありました。



メスティンを使って野外料理に挑戦

子どもたちから「火起こしして料理をしてみたい!」という言葉が出てきました。野外料理について調べるとメスティンという飯盒が使いそうだということを知りました。ごはんだけではなく卵焼きやパスタ、グラタンなど、メスティンを使えばいろいろな調理ができることを知った子どもたちは、グループごとに作りたい料理を決めて準備を進めてきました。野外で料理するため、手軽で簡単にできるものと考えました。

子どもたちのふりかえりより

- ・外で食べる料理はすごくおいしかった。みんなで協力できてよかったです。
- ・火が起きても料理がしづらと思うから、料理できるような台があるといいと思う。
- ・火きり棒をもっと太くして安定して回したい。

夏休み明けからは、薪を保管する薪棚や火起こし器の改良、直火で調理できるようなセッティングを子どもたちと共に考えていきたいです。

